

学生の声

「大学院入学で思うこと」

電子通信工学専攻 博士課程2回生 藤田 智 弘

修士課程を修了してから会社つとめを少しやっていましたが、現在は再び大学に戻り博士課程の学生として研究を行っています。ここではこのような経歴をとおして現在感じていることなどを述べます。

一旦社会人としての生活が身に付きますと、いろいろな癖がついているようで学生の気楽な生活にすぐに戻れなく最初はいろいろなところで戸惑いを感じました。企業では時間を区切って仕事をしていきますが、大学の研究ではこういうやり方はなじまず、よりフレキシブルにやっていった方がよく感じます。やはり、企業に比べると時間の流れが実にゆっくりのように感じます。しかしこれはこれで学校のいいところと思っています。

ところで、博士課程で研究をやらせていただく上で一番身にせまって深刻な問題は経済的な問題でしょう。現在在学中にもらえるお金は育英会をはじめとする各種奨学金や日本学術振興会などがありますが、返済の義務があったり採用されるのが難しかったりで昨今博士課程進学者が少ないのもこの点が大きな障害となっています。この点に関して何らかの対策がないと博士課程に行く学生の数は増えないように思えます。企業側からも今後ともますます大学側との共同研究を模索頂き、できましたら、研究費の一部を米国のようなTAやRAの制度のように学生に直接生活費をいただけるような仕組みができればありがたいです。

社会も多様化の時代となり色々なキャリアの積む人が、どんどん出てくると思います。我々も社会人生活での色々な経験をもとに目的意識をもって勉強しています。企業の方でもこれらの人材を積極的に採用して下さい切にお願いいたします。

「博士課程」

電子物性工学専攻 博士課程2回生 成 川 幸 男

「大学に行くからには、博士課程まで行こう。」と中学の時に、分野も何も考えず漠然と思い立ちました。そして、その思いは学年が上がっても変わらず、とうとう具体的な専攻分野を決めないといけない時期が来ました。大学受験です。当時、電気系と機械系の両方に興味があり、どちらを選択するか悩みました。その悩みを解決するきっかけとなったものがあります。それは、「電子立国日本の自叙伝」というNHK特集です。Geに針をたてたら電流が増幅するという「トランジスタの発見」。トランジスタ、コンデンサ、抵抗等を一つの石に集積するという「ICの発明」。たったこの二つが今の半導体業界の基盤になっているという驚きは、私の心を大きく揺さぶりました。さらに、アメリカの見よう見まねという手探りの中で半導体の研究を始め、苦勞に苦勞を重ね、アメリカに追いつき、そしてアメリカを追い越した日本の研究者達にあこがれを感じました。自分もそういう先人と同じ舞台に立ちたいと思い、半導体物性系のある本学本学科に受験を決意しました。そして、入学することができ、講義等を通じて半導体のことを学んでいくうちに、半導体が光るということを知り、さらに半導体に興味を持ちました。お恥ずかしい話、高校時代は半導体とはSiのことを示し、電子デバイスだと思っていました。)その興味は尽きることなく、学部・修士を通じ半導体の光物性を研究し、現在に至っています。現在の研究環境はKU-VBLの設立のおかげで、すばらしい装置が導入され、恵まれた環境となりました。この恵まれた環境を生かし、自分の探求心を満足させると同時に、自分の力で新しい独自の研究分野を開拓開拓できる一人前の研究者になるよう、努力していきたいと思っています。